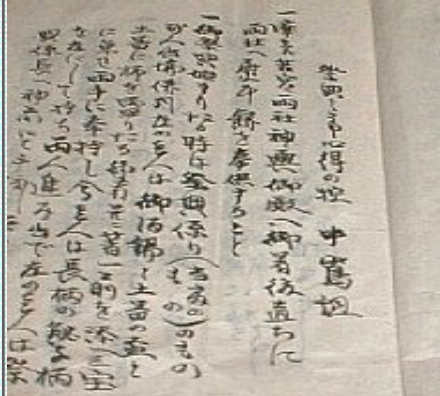


摩気神社の秋の例祭を神幸祭といい、摩気神社と関わりのあった辻田村、篠田村、今井村（竹井）、下新江村（仁江）、船阪村、大坪村（大西）、西山村（大西）、穴人村、半田村、大村（園部町城南



町）、黒田村、上横田村（横田）、下横田村（横田）北八田村（丹波町）などの村落から参加して行われていました。参加の仕方にはそれぞれの村落によって異なっていました。祭礼の形式は昔とさほど変わらず現在に伝えられています。神幸祭は明治15年までは陰暦9月1日から2日にかけて行われていました。現在は10月14日、15日の両日行われています。船阪においては10

月13日に神事宿で祭礼をするための様々な準備が行われていた。神事宿とは当番の組（5組順番）の中で新築の家かあるとその家が勤める習わしでありました。明治15年以前は12軒の宮主が交代で神事宿を勤めたといわれていますが、現在は神事宿を定めず、公民館を使用して祭礼を行っています。10月13日から15日にかけて行われている神幸祭について述べます。

10月13日



10月13日には、まず庭にお破怪（おはけ）をたてます。竹を約90cmぐらいに切って細く割り、両端、中程の三カ所を丈夫なひもですらないように編んでいきます。それを台の上に乗せ、後方の真ん中に支柱を立て、桷をくくりつけます。これがお破怪で穢れを祓うひもろぎで祭礼の際に神がここへ降臨されるといい、三宝の上にかわらけをかわらけには魚、野菜を載せ、中央の前に向かって右に洗米、



左に塩、後方中央に水、左右に神酒を載せ、お破怪の上に供えます。当日は摩気神社より宮司さんが見えられ、お稚児さんを含んだ祭礼参加者を神事が無事終了するように祈願をされます。祭礼に

使用する準備物は俵、的、幣束、紅白餅などを用意します。俵は新藁で編み、俵の中には新玄米を五合ずつ、ビニール袋に入れ、半紙で包

んだものを入れます。紅白2つ用意します。的はへ木板を青竹に挟んだもので長さ約2 m、大きさ25 cmのものを6本用意します。幣束はしのべ竹に御幣をくくりつけたもので5本束のものを3本、3本束の2本つくり、あらそで縛ります。紅白餅は化粧餅箱にいれ、奉納します、化粧餅箱は縦15 cm、高さ5 cmの箱で紅白紙を貼ります。御神燈は3対（六角形のもの1対、小のもの1対、大のもの1対）都合6個用意して、半紙に「御神燈」と記入して貼ります。こうして用意した御神燈は小さい御神燈を御旅所鳥居の前に設置します。大きい御神燈は旧道中ほどに設置します。六角形の御神燈は御輿倉に設置します。準備としてはその他に御旅所の本社、船阪庁（船阪の神事当番が着座する庁舎）、神役休憩所（船阪以外の神事出役者の休憩所）を掃除して、幕を張ります。吹き流しは2本鳥居南側両側に建てます。提灯は一对を旧道の入り口にもう一对を新道南側にたてます。「摩気郷氏神御旅所」と書いた幟を鳥居近くのグランドすみにたてます。そして、土俵の点検をします。櫛を1本用意して、御輿倉の中に供えます。床の間に神棚を用意し、前に三宝をおき、かわらけに魚、野菜をのせ、中央に向かって右に洗米、左に塩、後方中央に水、左右に御神酒を供えます。床の間の配置は中央に神棚、右に的、前方に幣束、神棚の右に長柄鉾子2個、左に銀製御神酒錫をおきます。銀製御神酒錫の前に俵、紅白の餅箱をおきます。船阪の氏神八幡宮にも幕張りをし、御神燈1対をつけます。また、櫛を用意して、供えます。こうして、すべての準備が終了すれば、宮司上田さんと流鏑馬お稚児を正座にして、本膳2膳を用意し、組一同は左右に着座して祝宴をあげます。宮司さんとお稚児さんに用意するものは本膳、焼き物（鯛）、折り詰めなどがあります。これが船阪における13日の祭礼準備であります。船阪と同様に仁江（もと下新江）でも公民館で執り行う。仁江には宮司さんはいかに宮司当（くじゅうとう）という篠田、辻田、今井の8軒の家筋のものが1名、宮司さんの代役として出席するといひます。（昭和初期までは宮司当の任にあたっていたのが神巫であったといひます。）

10月14日

早朝、穴人の菅原神社氏子の宮守当番の正使と副使が清酒 2 升と新穀の煎米 1 箱（2 升 5 合）及び枝豆 1 束を紋付袴の正装で摩気神社へ持参し、供えられます。このあと宮司さんによって祝詞があげられ、玉串奉納のあと、穴人の正使、副使 2 名は摩気神社の宮主によって接待をうけます。これを「穴人献せんの儀」といいます。宮主とは旧摩気村の小寺（3 軒）、神田、小越の 6 軒の家筋のものが 6 年交代でつとめるもので役割は祭礼にあたって神役をつとめます。祭礼 5 日前に「精事入り」と称して斎戒するといえます。また、宮主は絵馬舎におかれた御輿の飾り付けをして、御輿渡御に備えます。摩気神社には午前 10 時に区長、氏子総代などがあつまり、祭典が執行されます。神幸祭のはじまりです。御輿渡御、神事に必要な品物が唐櫃にいれられ、用意されます。午後 2 時、仁江より流鎚



馬と神役者が裃着用の上、幣束、的を持って、また、宮司当が御輿奉迎のため摩気神社に到着すると、宮司によって祭神の分霊が御輿に奉遷されます。これを「お宮遷しの儀」といい、御輿は御旅所

めざして出発します。御輿は途中仁江の蛭子神社に立ち寄り、蛭子神社の分霊を御輿に奉遷したあと、再び、御旅所めざして出発し、船阪でも御輿出迎えのため、午後 2 時 30 分裃に襟を正して公民館を出発します。昭和初期までは横田の若宮神社の御輿も御旅所へ巡幸していました。船阪は横田の若宮神社の御輿を出迎える役割でした。しかし、戦後横田の若宮神社から御輿が巡幸されなくなって以来、仁江と同様に摩気神社の御輿を出迎える役目をしています。黒田境まで出向き、横田若宮神社の方を向いて、直立の上、礼をしていました。御輿が御旅所へ巡幸されたあとは公民館へ戻り、夜の部に備えます。夜は午前 1 時沙汰人（宮司の指示により、神事の司式と連絡にあたる役目の人で穴人から 2 年、大西から 1 年交代でです）を先導に御旅所へ向かいます。午前 2 時の祭式開始で厳かな神事が行われます。船阪より持参した薪 10 束、柴 2 束を大西（大坪）出役者によって神前に篝火が焚かれます。このあと、沙汰人は御幣をもち、神前の人を抜きます。沙汰人は宮司さんの指示で船阪神役者に祭式を始めることを伝えます。このあと、船阪庁にいる船阪神役者は白足袋の裸足で口に榊



をくわえ、御神酒、御膳（１３膳）をお供えします。その後、沙汰人は泥鰯取りの式を摩気神社の守り刀を持って行います。このあと、半田出役者は沙汰人の呼び出しで裸の上、籠をつけ、刀で練りを行います。そのあと、竹井出役者も同様に行います。そのあとに沙汰人は呼び出しをして、角力式が行われます。その呼び出しは次の通りです。

- 一．北八田待角力 半田出角力
- 一．北八田待角力 半田出角力
- 一．下新江待角力 大村出角力
- 一．下新江待角力 大村出角力
- 一．上新江待角力 横田出角力
- 一．穴人待角力 黒田出角力
- 一．西山待角力 船阪出角力
- 一．船阪半角力
- 一．上新江練り 半田練り

というように行われます。「待角力」とは先にでて待ち、「出角力」とは後よりでて四股を踏み、拍手、構え、立ち上がり、組の型を行います。「半角力」とは一人でて四股踏み、拍手、構え、立ち上がり、組の型を相手のあるがごとく執り行うことをいい、神と角力をとるわけです。北八田は現在の丹波町北八田、下新江は仁江、大村は城南町、西山は大西、上新江は竹井となりますが、北八田、黒田、横田、大村は過去には参加していましたが、現在は参加されていません。このように厳粛かつ厳かな深夜の神事が摩気神社御旅所において行われています。

10月15日



10月15日午前6時に公民館を出発して、馬印を先頭に的、弓、矢を持ち、御旅所へ向かいます。これは朝的と称して、流鏝の式を行います。10月15日午後2時30分沙汰



人の先導で用意したお供え物を持ち、弓矢を持って御旅所へ向かいます。祭式は午後3時から行われます。沙汰人は神前の人をまず被います。14日と同様に

御神酒、御膳などを備える儀式が行われます。このあと、お千度とい



い、仁江を先頭に幣束、弓矢、俵などをもち、穴人、西山は鍬をもち、牛（現在は牛の模型）を引いて御旅所の



本社の中から船阪庁の周囲を3周します。この後、仁江の神役者は宮司より下げ渡された幣束をお稚児に渡します。お稚児は介添え役の神役者から幣束を受け取り、幣束を持ち、左右左と振り、一礼の後、右左右と振ります。このあと、別の神役者も



宮司から幣束を下げ渡され、お稚児に幣束を渡します。今度は幣束を持ち、右左右と威勢よく振ります。一礼のあと、左右左と振ります。このような幣束振りも船阪のお稚児によっておこなわれます。その後、流鏝が行われます。矢を射ることを3度行います。以上の神事が終了すると御輿は摩気神社に環幸されます。これを船阪は街道沿いまで見送ります。こうして2日間の祭礼は終了します。